

# J.S.V.R.

# ニュースレター

## No.15

2008.9

発行人 バレーボール学会  
会長 矢島 忠明  
発行日 2008年9月30日  
事務局  
〒444-0005 岡崎市岡町原山12-5  
愛知産業大学 後藤研究室  
TEL.0564-48-4511 FAX.0564-48-7756  
E-mail:jsvr@asu.ac.jp  
<http://www.jsvr.org/>

## バレーボール学会

The Japanese Society of Volleyball Research

### 巻 頭 言

### 北京オリンピックに想う

副会長 柏 森 康 雄

今年の夏は地球温暖化の影響からか例年以上に厳しい暑さが続きましたが、会員の皆様には如何お過ごしでしょうか。

小生は4年に一度のスポーツの祭典「第29回夏季オリンピック北京大会」の素晴らしい競技場面に釘付けになっていました。水泳;マイケル・フェルプスの史上最多8冠の達成、陸上;ウサイン・ボルトの100m9秒69、200m19秒30の驚異的な世界新記録による金メダル獲得など人並み外れた身体能力の高さに驚かされました。一方、日本選手ではやはり北島康介のアテネ五輪に続く平泳ぎ2種目連覇には王者の風格を感じました。また、ソフトボールが五輪3連覇中の米国を3-1で下し、初の金メダルを獲得しました。日本が球技種目で金メダルを獲得したのは、1976年モントリオール大会の女子バレーボール以来、32年ぶりの快挙であります。特に上野投手の2日間・3試合で28イニング、413球の熱投は国民に大きな感動を与えました。

さて、我日本バレーボールチームの活躍は如何に。壮絶な五輪予選を見事に勝ち抜き、92年バルセロナ大会以来となる男女そろって五輪に出場することができ、大いに興味を惹きつけられました。しかし、16年ぶりに本大会に出場した男子は、残念ながらグループ戦5戦全敗の成績に終わり、またメダル候補と期待された女子もグループ戦2勝3敗で8強入りは果しましたが、決勝トーナメントでブラジルに完敗し、世界の壁の厚さをまざまざと見せつけられました。

そこで、この世界の厚い壁を打ち破るためには、チーム強化に携われていた関係者はもちろん、我々バレーボール学会の会員も建設的な意見を提言し、次回に備えなければなりません。そこで、貴重な紙面をお借りして、私の想いを述べたいと思います。

まず、1)技術・体力的な面では、世界は「よりスピードとパワー」の両方を求めて進化している。しかし、残念ながら日本はスピードは一流であるが、あいかわらずパワーと高さがなくままである。そのため、男女ともブロック力が極端に弱く、カウンターアタックからの得点力が非常に貧弱であった。また、サーブ力においても諸外国と比べると威力に欠け、コースを狙い打つとか前後に揺さぶるなどの工夫もみられなかった。

しかし、出場した選手をみると、男子では越川、石島、清水、福澤等、また女子も荒木、栗原、木村

等、若くて「スピードとパワー」を兼ね備えたすばらしい能力を持った選手が育ちつつある。これらの選手を中核にして、さらにそれに続く若い選手の育成に力を注ぎ、継続的なチーム強化に努めてほしい。特に、高さのあるセッターの計画的な育成が急務である。だが、前号で明石副会長が「JVA一貫指導の具体的指針の内容がバレーボール関係者に十分浸透していない点」をご指摘されているように、小生もそれを強く感じ誠に残念に思います。また、現在の一貫指導計画がサッカーのそれに比べるとあまりにもお粗末であり、早急に一貫指導計画の見直しを図って、バレーボール選手として素質ある人材を、世界のステージにつなげるために、バレーボールに関わる様々な機関や関係者の連帯、協力により、一層緊密な関係を築くことが必要である。

2) 戦術的な面では、キューバ女子チーム以外は、ほとんどのチームがコンビ攻撃の中に積極的にバックアタックを絡めた攻撃方法を取り入れ、戦術面のグローバル化が進んでいる。特に、女子バレーは男子並みの戦術を取り入れ、急速に進歩している。日本チームも決して戦術面の遅れはないと感じるが、これまでの日本バレーボール界の歴史を考えると、何か物足りなさを感じざるを得ない。これも古い世代の感傷なのだろうか？

3) 精神的な面では、男女ともそのもろさが目立った。確かに、男女とも現在のチーム力では大変厳しい試合状況が予想されていたにも関わらず、苦境に立たされた時のメンタル面の対処法がみられず、日本人の特質であった粘り強さや忍耐力など我慢強い戦い方がみられなかったのは寂しい限りである。また、男子アメリカチームが準決勝ロシア戦でみせた集中力の凄さも是非見習ってほしいと同時に選手個人の強さ(自律心、克己心等)の確立が望まれる。

最後に、我々の学会活動も13年目を迎え、この間学会独自の活動は、年々会員の皆様方のご支援・ご協力のお陰で発展してきました。しかし、学会活動の成果をバレーボールの普及・強化の具体的な活動に結びつけられていたかと問いかけてみると、若干疑問を感じざるを得ません。ジュニアからトップレベル競技者までの一貫指導システムの構築や若手指導者の養成、また選手強化事業への支援など日本バレーボール協会の活動を支援し、連携した活動ができるように、本学会の方から働きかける必要があるのではないだろうか。今後この点を真剣に議論し、バレーボールの普及・発展に寄与したいものである。

